

# 近現代中国史研究の碩学 聞黎明先生小伝

丹野 健一郎

第一工科大学(東京上野キャンパス)  
〒110-0005 東京都台東区上野7-7-4  
e-mail: k.tanno@ueno.daiichi-koudai.ac.jp

## A small biography by Prof. WenLiming, a scholar of modern Chinese studies

Kenichiro Tanno

Daiichi Institute of Technology (Tokyo Ueno campus)  
7-7-4 Ueno Taito-ku Tokyo 110-0005 Japan  
e-mail: k.tanno@ueno.daiichi-koudai.ac.jp

### Abstract

Wen Liming(聞黎明), a Chinese historian, died on the afternoon of January 3, 2022. Wen liming was a descendant of Wen Yiduo(闻一多) and was an expert in Wen Yiduo research, Xinanlianhedaxue(西南联合大学) research, and Chinese political history research.

The author of this report was able to carry out research and research under the rigorous guidance and enthusiastic encouragement of Wen Liming, and was able to obtain a PhD from a graduate school in Beijing.

In this report, we would like to express our heartfelt gratitude and prayers for the soul of Wen Liming who died while looking back on the footsteps of Wen liming.

Keywords: Wen Liming Chinese historian 聞黎明

### 1. はじめに

中国社会科学院研究生院近代史系の教授だった聞黎明先生(写真1)が2022年1月3日に71歳で逝去された。筆者と聞先生のつながりは、2005年9月の大学院進学からはじまり、大学院修了後、筆者の事情による日本への帰国後も断続的に連絡をとっていたところであった。聞黎明先生ご逝去の報(写真2)に接し、心より哀悼の意を捧げたい。あらためて、2005年9月から聞黎明先生が外国人留学生として筆者を受け入れていただいたご縁、および、その後のご指導に感謝の気持ちを申し上げたい。そして、聞黎明先生の小伝を作成することは、まことに僭越なことではあるが、指導を

受けたひとりの弟子のつとめとして、中国の近現代史研究の碩学のひとりともいふべき聞黎明先生の足跡を振り返りたいと思う。



(写真1) 生前の聞黎明先生の写真

(闻一多长孙闻黎明来渝举办讲座の記事より)

<http://news.sina.com.cn/o/2013-09-01/042928100615.shtml>

新浪新聞中心 (2022年3月23日閲覧)

# 讣告

中国共产党党员、中国社会科学院近代史研究所研究员、享受国务院政府特殊津贴专家、退休干部闻黎明同志，因病医治无效，于2022年1月3日14时在北京逝世，享年71岁。

定于2022年1月7日（星期五）上午9时，在北京八宝山殡仪馆竹厅举行闻黎明同志送别仪式。

谨此讣闻

近代史研究所闻黎明同志治丧小组  
2022年1月4日

（写真2）聞黎明先生の所属先であった近代史研究所から出された聞黎明先生の訃報とその訳文（※筆者訳）を以下に載せる。

## 訃報

中国共産党党员、中国社会科学院近代史研究所研究员、国务院政府特別待遇専門家、退職幹部の聞黎明同志、闘病の結果、2022年1月3日14時に北京で逝去、71歳の生涯を閉じました。

2022年1月7日（金曜日）午前9時より、北京市八宝山斎場竹ホールにて聞黎明同志の告別式を行います。

ここに謹んでご通知申し上げます。

近代史研究所聞黎明同志葬儀班

2022年1月4日

## 2. その誕生から青年期まで

聞黎明先生は、中華人民共和国の建国から間もない1950年9月に陝西省西安市で（注1）聞立雛の子として誕生（注2）した。この他に、聞軍という名の妹がいる。なお、父親である聞立雛は、日中戦争当時、戦火を避けるために雲南省へ移動した大学により編成された西南連合大学の文学部長であり、詩人でもあった聞一多の次男である。公開されている（注3）資料によると、聞立雛は、1928年に誕生し、1948年より陝西、新疆、北京にて革命事業に身をささげるとあるため、非常に困難な時代に聞黎明先生は幼少期を過ごしたことは、想像に難くない。青年期については、1966年に北京市外交部街中学を卒業後、聞黎明氏が2014年9月に中国で出版された『私のかつての名前は知識青年（我曾经的名字叫知识青年）』（作者 子蘊 出版社 花山文艺出版社）に寄せた序文の中で、「1968年には、北京から黒竜江省完達山の北麓にある七里嘎山の黒竜江生産建設兵団第32団に下放され、農作業に従事していたが、1969年になると政治処の報道員となった」と説明している。その後、1973年から1974年までは、新疆大学化学学部の実験助手として勤務した。さらに、1974年に北京大学歴史系に入学し、1977年からは、中国社会科学院近代史研究所に配属となっている。なお、この時代は、いわゆる文革時期にあたり、学制は小学5年制、中学+高校で4年制、大学は3年制というスタイルが普及しているため、現在の大学在籍4年制は、1978年7月の中国の大学入学統一試験の回復まで待たなくてはならなかった。1977年に北京大学歴史系を卒業以降、中国社会科学院近代史研究所で史料編纂についての調査業務を開始し、後には祖父に当たる聞一多に関係する調査や中国近現代の政治的な活動をする知識人の研究に従事し、中国のいわゆる革命時代の資料の調査を通じて、この領域の研究に大きな貢献をした。

3. 主な著作、研究、教育活動等について

以下に主な聞黎明先生の著作物、論文をあげる。

<著作物>

『聞一多伝』

（人民出版社 1992年10月 のちに、『聞一多伝』 聞黎明、鈴木義昭による日本語訳 北京大学 2000年として出版）

『中国复兴枢纽 抗日战争的八年』

（北京出版社 1995年）

『現代学術史的胡適』

（共著 三联出版社 1996年）

『詩人 学者 民主闘士 聞一多』

（中国撮影出版社 1996年）

『西方民主与近代中国』

（中国青年出版社 2003年）

『第三种力量与抗战时期的中国政治』

（上海書店出版社 2004年）

『聞一多画伝』

（河南人文出版社 2005年）、

『抗日战争与中国知识分子——西南联合大学的抗战轨迹』

(社会科学文献出版社 2009年)  
『聞一多 涅槃の鳳凰』  
(秀威諮詢科技股份有限公司 2010年)  
『聞一多(民盟历史人物)』  
(群言出版社 2012年)  
『聞一多年譜長編』  
(上海交通大学出版社 2014年)  
『西南聯大・聞一多：走向現代化的中國知識分子』  
(人民出版社 2016年)

<論文>

《處理地震歷史資料的幾個問題》(『地震』  
1981年5月)  
《元代地震後更改地名一事淺議》(『地震』  
1983年10月)  
《梅貽琦日記選》書後 侯菊坤共著、(『近代  
史研究』1990年3月)  
論一二一運動中的大學教授與聯大教授會—中  
國40年代的自由主義考察之一  
(『近代史研究』1992年8月)  
王世傑與國民參政會(1938-1944)  
(『抗日戰爭研究』1993年10月)  
論抗日戰爭時期教授群體轉變的幾個因素  
——以國立西南聯合大學為例的個案研究  
(『近代史研究』1994年9月)  
國防參議會簡論  
(『抗日戰爭研究』1995年5月)  
1944年：中國社會的歷史性轉捩——兼論  
民族工商業者“問政”的原因  
(『近代史研究』1995年7月)  
聞一多與“大江會”——試析20年代留美  
學生的“國家主義觀”  
(『近代史研究』1996年7月)  
“國民大會議政會”刍議—抗戰時期改革中  
央政治體制的重大設計  
(『抗日戰爭研究』1996年9月)  
黃炎培與抗日戰爭時期的第二次憲政運動  
(『近代史研究』1997年9月)  
抗日戰爭時期的中國第三種力量  
(『抗日戰爭研究』1998年6月)  
六參政員訪問延安再研究  
(『抗日戰爭研究』1999年6月)  
皖南事變時期的中間黨派——關於中間勢力的  
研究  
(『抗日戰爭研究』2002年12月)

長沙臨時大學湘黔滇“小長征”述論  
(『抗日戰爭研究』2005年3月)  
美國對李公朴、聞一多被刺事件的反應與對  
策—李聞慘案再研究之一  
(『江漢論壇』2006年11月)  
歷史的口碑 有益的嘗試—讀齊紅深先生的  
《流亡—抗戰期間東北流亡學生口述歷史》  
(『教育科學』2009年4月)  
戰時中國知識精英對戰後處置日本問題的  
若干思考  
(『史學月刊』2009年8月)  
“有田-克萊琪協定”在中國的反響—以西南  
聯大國際問題專家的觀察與評析為中心  
(『史學月刊』2010年2月)  
關於西南聯合大學戰時從軍運動的考察  
(『抗日戰爭研究』2011年7月)  
李聞慘案之善後  
(『近代史研究』2011年7月)  
聞一多參加大江會始末  
(『江淮文史』2013年3月)  
西南聯合大學的青年遠征軍  
(『江淮文史』2014年3月)  
中國知識精英對戰後處理日本的主張  
(『江淮文史』2017年11月)  
聞一多與民盟——一個愛國知識分子的選擇  
與歸宿  
(『群言』2019年11月)  
聞一多與中國民主同盟  
(『黃岡師範學院學報』2020年2月)  
子女筆下的聞一多  
(『群言』2020年11月)

などがある。(このほかにもあるが、紙幅の都合上、割愛することをご容赦いただきたい。)

さらに、教育活動としては、中国社会科学院研究生院近代史系の大学院教授、河南大学や雲南大学、雲南師範大学などでは教授や特別研究員として、調査活動だけでなく、多くの歴史研究を志す若者たちを育てていたことから、聞黎明先生のご逝去以降、聞黎明先生と関係のあった多くの関係者が追悼文を発表している。このほかにも、日本国内では慶應義塾大学、早稲田大学、二松学舎大学、桜美林大学で客員教授や特任教授、客員研究員として、さらに、台湾の研究機関の客員研究員として関係する

資料の収集、さらに中国の聞一多研究会や現代史学会、中国の地震研究の学会などの団体でも要職に就いていた。なお、1997年には中国政府の特別待遇を受ける専門家としての名誉を受け、2013年9月には近代史研究所を退職する。

ところで、筆者が聞黎明先生のことを知るきっかけとなったのは、中国社会科学院の聞黎明先生が桜美林大学へ招聘された際に、当時、聞黎明先生と深い交流のあった当時の文学部中国語中国文学科の教員であった南條克己先生や植田渥雄先生から、聞黎明先生のご紹介を受けたことがきっかけである。当時、筆者は北京市内の大学で日本語学科の教員として働きながら大学院の受験準備をすすめ、2005年9月から中国社会科学院研究生院近代史系の博士課程に進学が決まったことから、聞黎明先生が主宰する研究室の学生となった次第である。

#### 4. ひとりの聞一多の研究者として

聞黎明先生は、中国近現代史における当時の中国の知識人たちの研究を進めていた。この中で、聞黎明先生は、特に近代中国の文化人のひとりであり、のちには当時の国民党の腐敗と国共内戦に反対する運動のメンバーでもあった李公僕の追悼会に参加し、その帰り道に、当時は国民党の特務機関の関係者とされる者の手により暗殺されたとされる聞一多(写真3)の研究者でもあった。



(写真3) 昆明西倉坂の西南連大宿舍前にて  
<https://www.nfpeople.com/article/9744>  
 南方人物周刊 (2022年3月23日閲覧)

たとえば、1994年に湖北人民出版社が出版した『聞一多年譜長編』は、聞黎明先生の心血を注いだ著作であり、聞黎明先生が以前に揚州で発表された(注4)『第1回中華口述史ハイレベルフォーラム』での表現を借りるならば「聞一多の研究者たちが資料を探す時間を節約でき

るようにするため」という記述からもこの領域の研究をする者に対して非常に丁寧な構成を心がけていたことがうかがえるだろう。いうまでもなく、聞黎明先生は聞一多から見ると孫にあたるが、実際には面識がない。しかし、小さいころから、父親の聞立雕、および、周囲から祖父である聞一多のことを聞かされて育ったことを本稿の筆者も院生のころに聞黎明先生のご自宅や研究室で伺ったことがあった。そのほとんどは、聞一多が活躍した当時の時代背景についての説明などであったが、振り返って、過去の資料としてみる写真の中の聞一多の姿と聞黎明先生が重なってしまうのは、筆者だけが思ってしまうことではないだろう。

なお、聞黎明先生は、聞一多に関する研究だけでなく、学生への指導と並行して、1949年までの中国共産党を中心とする新民主主義革命史を発掘するため、当時のことを体験し、記憶もしている関係者たちに対するインタビュー調査も進めていたようであったが、インタビュー対象者がすでに高齢、あるいは重い病気のため等の事情から、思うように調査が進まないことがあった。そのことを本稿の筆者自身が博士論文の指導の際に知り、いわゆる「口述史(オーラル・ヒストリー)」に関するいくつかのアドバイスを聞黎明先生より伺ったことで、学位論文の執筆に苦労していた筆者に一筋の光明がさしてきたことは言うまでもない。特に、新型コロナウイルス感染症の影響が世界に広がる前までは、積極的に(写真4)聞一多の足跡をたどる旅、あるいは西南連合大学に関係する調査活動を精力的に行っていたところであった。



(写真4) 2015年7月に開かれた聞一多展覧会で  
 長女の聞亭さんと一緒に参観 新浪财经  
<http://finance.sina.com.cn/jjxw/2022-01-04/doc-ikya-kumx8200876.shtml>  
 (2022年3月23日閲覧)

## 5. 聞黎明先生の歴史研究に対する姿勢

聞黎明先生の歴史研究に対する姿勢は、これまでの研究成果を見れば、一目瞭然であり、その姿勢は、歴史の事実を掘り起こすことにあるといえる。例えば、聞一多に関する調査の中で、創成期のころの共産党と国民党左派の殴り合いのけんかについての記録があり、この内容について聞黎明先生の表現を借りるならば(注4)「……1926年に聞一多が北平(筆者注；現在の北京)で中国共産党と国民党左派が暴力事件を起こしたという内容を書いているが、これは過去において、誰も提起したことがない……」とあり、ご自身が別の資料から発見した当時の新聞資料で確認したうえで、「……私がこのようにするのは(筆者注；暴力事件のこと)……私は歴史研究者の最低限のルールとして歴史を尊重することである」と歴史研究者としてのなすべきことを明らかにしている。おそらく、このような意見を述べられた調査当時の歴史研究を取り巻く様々な事情からこのような表現をされたのだろうと推察するが、非常に味わい深い言い方であり、聞黎明先生の後に続く歴史研究者たちに対して、常に心にとどめておくべきアドバイスでもあろう。

## 6. おわりに

2022年の年が明けた1月3日のこと、聞黎明先生の個人的なSNSのプロフィール写真が急に白黒写真になったことを知り、何か不吉な予感がした。その後、聞黎明先生の訃報を知ることとなり、聞黎明先生と交流のあった多くの関係者が哀悼の意を伝える内容のメッセージを中国のSNSや(注5)中国現地の新聞記事に投稿しており、生前の聞黎明先生の人柄が偲ばれる内容となっていることは言うまでもない。

筆者自身、世界的な新型コロナウイルス感染症の影響のため、2022年1月に中国・北京で行われた聞黎明先生のお葬式に参加することはできなかったが、インターネット経由で花輪を斎場におくることができた。しかし、直接、聞黎明先生のお別れ会に参加できなかったことが悔やまれてならない。さらに、現在(※2022年5月)も続くコロナ禍のため、聞黎明先生の墓前にも参れないため、非常に

もどかしい。聞黎明先生のご逝去は、あまりにも早く、残念でならない。

最後に聞黎明先生との記憶を思い出せば、非常に多くあるが、中でも生前に、聞黎明先生の部屋へお邪魔すると、ご家族からは「禁煙中」と聞かされてはいたが、某絵柄の描かれた中国製のメンソールのタバコを愛用されていた。ある晴れた午後の時間に、論文のことで相談をするために伺うと、タバコの煙をくゆらせながら、少し早口で話してくれた聞黎明先生が懐かしい。改めて、中国近現代史の碩学のひとりである聞黎明先生のご逝去に際し、かつてご指導いただいたひとりの日本の留学生として、心より哀悼の意として自作の漢詩(および、書き下し文)をささげたい。

聞老師一生勤耕  
書墨如山育后人  
桃李香薰滿天下  
功名永久留青史

聞老師は一生を耕作することに勤しみ  
書墨は山のごとし後に続く人を育てる  
桃李はよい香りを薫らせ天下に満つる  
功績と名声は永く久しく青史に留める

### <注釈、および参考文献>

(注1) 別の名を韋英ともいう。聞一多が凶弾に倒れた際に同じく現場に居合わせ、その際の銃撃で大けがを負った長男の聞立鶴のこともあり、後に生命の安全のため、韋英と改名した。

(注2) 戸籍上は湖北省浠水出身となっている。

(注3) 詩人的主要天賦是“愛”

—聞立離先生讲述父亲聞一多— 西城区第一图书馆  
<http://218.249.168.11:8080/index.php/content/index/id/3351.html>

(2022年5月1日 閲覧)

(注4) 略议“口述史”一兼及口述采的若干体会 聞黎明  
首届中华口述史高级论坛

<https://www.chinafolklore.org/web/index.php>  
(2022年5月1日 閲覧)

(注5) 胸中浩浩荡荡 一枕高甜—送别聞黎明先生

楊滿 北京青年報  
<https://app.bjtitle.com/8816/newshow.php?newsid=6072906&typeid=99&uid=0&did=&mood>

(2022年5月1日 閲覧)